

教師の「気づく力」とは何か

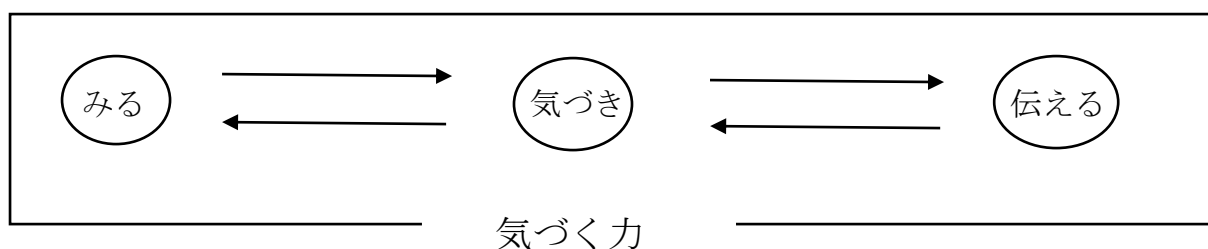
渡部 真智子

<「気づき」の曖昧さ>

- ・真摯に子どもに、自分に向き合うことで気づき力が高まっていく
- ・表層に表れているものだけではなく、隠れているもの、表現できないものがあるということに気づく力
- ・「気づく力」は「傷つく力」

※参考文献『子どもを「育てる」教師のチカラ』 特集 教師の「気づき力」

<自分なりの「気づく力」>



「気づく力」とは「みる」と「伝える」と大きな関係があると考えます。

「気づき」を得るためには子どもを「みる」ことが必要だ。そしてその得た気づきを子どもに「伝える」ことが必要だ。逆に子どもに「伝える」ことによりそこで生まれたコミュニケーションや会話から新たな「気づき」を得ることも可能だと考える。

また、そこで得た新たな「気づき」から新しい視点で子どもを「みる」こともできるのではないだろうか。

つまり、この「みる」、「気づき」、「伝える」の三要素がそろって「気づく力」になると考える。

<「みる」ことの一例>

子どもの「良さ」をみつけたらメモをしておく。

どんな些細なことでも見つけた時にメモをしておく。そして名簿に整理する。

メモがたくさんある子、あまり記入されていない子など自分の子どもをみる目の曖昧さを感じ、今後の「みる」に生かすことができる。

※参考文献『子どもの心をどうつかむか』

<今後の研究に向けて>

「みる」と「伝える」について多くの本を読み、自分なりに「気づく力」につながる「みる」と「伝える」を見つけていきたい。